

Title	フランス文学という遊び
Sub Title	French literature at play
Author	荻野, 安奈(Ogino, Anna)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2005
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.88, (2005. 6) ,p.118(193)- 126(185)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2004年度藝文学会シンポジウム：文学における"遊び"
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00880001-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランス文学という遊び

荻野 安奈

昨年の春、金原亭馬生師匠に弟子入りし、金原亭駒ん奈という名前をいただいた。奇しくも「文学における遊び」のシンポジウム翌日が、二つ目の襲名披露に当たっていた。ふつう入門から二つ目には数年かかる。破格の大出世！　の実体は、親指小僧がゲタ十足はいて身長をゴマ化しているようなものだ。文学の畠から落語の田んぼに出向いてフィールドワークに励んだご祝儀、と理解している。

落語のマクラといえば、小話である。

「隣の空き地に囲いが出来たね」

「へー」

なんぞが代表的だが、実は師匠によれば、これでもまだ、饒舌すぎる。短縮ヴァージョンを、以下に記す。

「空き地に囲いが出来たね」

「へー」

空き地に「隣の」という形容がつけば、聴く者の想像力が限定を受ける。「うちの隣には空き地はないぞ」などと気を回して、話に集中できなくなる。その人にとっての空き地は千差万別で、隣もあれば裏もある。角の信号を曲がって百メートル先、のこともある。描写の省略が、話者と聴衆、双方の自由を保証してくれる。

以上が私なりのマクラだが、後日談がある。フランス文学の同僚が、この日の聴衆に即席でアンケートを試みた。「空き地」だけがいいか、「隣の空き地」のほうがいいか。「空き地」派のほうが、「隣の空き地」派より、一名だけ多かった。

微妙な差は、同僚の配慮かもしれない。本来は師匠の話芸で比べるべき

ところだが、こうして字面になってみると、読者はいかなる印象を持たれただろうか。

それはさておき、落語に戻る。文学はまだか、と思われるかもしれないが、私にとって落語と文学は地続きなので、もう少しご勘弁願いたい。入門して、初めて学習した。私が周囲の迷惑かえりみずく飛ばす「おやじギャグ」は、語の本来的な意味でのシャレではなく、まさにダジャレであった。いわゆるシャレは、江戸時代にはやった雑俳の流れをくむ。同音反復を避け、微妙に字句を変え、語の頭にもってくる。たとえば「家にあるもの一切」というお題が出たとする。「センタッキーフライドチキン」なら、洗濯機がケンタッキーに掛かり、同音ではなく、語頭にきている。これが由緒正しいシャレである。ダジャレのほうは、「お風呂に入ってセント一開始」。銭湯と戦闘は同音、おまけに位置がよろしくない。

シャレの他にも言葉遊びはゴマンとあって、日本人なら耳になじんだ「恐れ入谷の鬼子母神」は、「ちょっと町谷の満光寺」同様、「無駄口」に分類される。「冠沓」はもらったお題を冠（冒頭）と沓（末尾）に散らせて見せる。アジサイなら、「アジな色合い、見事な色サイ」という具合。「雪隠し」は下ネタを、雪が月を隠すがごとく、ほかして表現する（例は……省略）。

むろん言葉遊びは日本の専売特許ではなく、人間がいて言語が存在すれば遊びになる。フランス語ならでは、をひとつ紹介する。Javanais は語の中に av や va を挿入する。かくして “bonjour” が “bavonjavour” となり、ややこしくて舌を噛みそうだが、隠語感覚を楽しめる。Calembour は地口。この例として、辞書にも載っているのが “femme molle à la fesse, femme folle à la messe”。fesse（お尻）の molle（柔らか）な femme（女）、の f と m を入れ替えただけで、messe（教会のミサ）の folle（狂った）女、になる。ファムモルアラフェス、ファムフォルアラメス、とリズムもたいへん結構だ。

以上、生徒が教室で喜んでやるたぐいの遊戯と言われてしまえばそれまでだが、文学はありがたいことに、小中学生の教室とも地続きになってい

る。仏文学の園で、大のオトナが遊び興じている中には、javanais で一曲作ったシャンソン歌手のシャルル・ゲンズブルがいる。20世紀のゲンズブルの隣には 16世紀のフランソワ・ラブレーがいて、実は先ほどの地口、「いけいけ桃尻娘、くるくるパープー娘」(荻野訳) も彼の作中にある。

「文学における遊び」というお題なら、ラブレーひとり出しておけば、数時間どころか、夜が深夜となり丑三つ時を過ぎて、鳥カーソと鳴いて朝が来るまで発表し続けてもネタは尽きない。ラブレーはいわば、遊びの一人百科事典なのである。シンガーソングライターならぬ修道士ドクターの彼は、世界という本を読みつつ本物の本も読んだ。さすらいのインテリで、中世から当時に至る民衆の笑いを巷の泉から汲み上げると同時に、ギリシャ・ローマの海からも、自作の中へ運河を引いた。

ラブレー百科をばらばらめくってみよう。彼の初期作品は、『第二之書パンタグリュエル物語』(1532年) と、『第一之書ガルガンチュワ物語』(1535年?)。『第二』が『第一』より先なのは、息子パンタグリュエルの物語がウケたために、父ガルガンチュワにさかのぼって書いたためである。共に騎士道物語のパロディで、主人公が巨人、というのがすでに怪しいけれど、家系、誕生、幼年時代、修業時代そして活躍、という筋立ては、ジャンルの要請に則っている。「遊び」のテーマにぴったりなのは、ガルガンチュアの子供時代に充てられた数章だろう。第 11 章は、チビ巨人の 3 歳から 5 歳までを描く。彼は他のチビたち同様に、「飲んだり・食べたり・眠ったり・食べたり・眠ったり・飲んだり、眠ったり・飲んだり・食べたりしていた」。飲・食・眠、のひとことで済むのが、繰り返しで三倍に伸びているが、まだ驚くのは早い。饒舌とはいえ説明的な、つまり最低限の意味が保証された地の文から、一気にテンションが上がり、テクストはナンセンスの祝祭に突入する。

<毎日のように、泥水のなかを転げまわったり、鼻面を真黒けにしたり、顔を汚したり、靴の踵を潰したり、蠅を相手に欠伸を連発したり、

欣んで蝶々を追いかけたりしていたが、蝶々と言えば、父君グラン
グウジエは蝶々国を支配していたのである。ガルガンチュワは、自分
の靴におしっこをひっかけたり、肌着のなかへうんこをしたり、袖で
鼻をかんだり、肉汁のなかへ漬を垂らしたり、ところかまわずに泥ん
こになって転げまわったり、上靴で酒を飲んでみたり、いつも籠の胴
腹へ体を擦りつけたりしていた。>

これで全文、といいたいところだが、実は同じ調子で延々と、引用部分
の数倍は続き、章の末尾に至ってようやく語りに戻る。まだ分別を知らない
子どもが漬、うんこ、泥まみれで遊びまわる天下泰平の情景。昔も今も
変わらない、と思わせる普遍性が、この場にはある。読者も作者も、ガル
ガンチュワが王子であることをいったん忘れ、漬垂れ小僧の活躍ぶりを、
半ば飽れ、半ば愛でるつもりになる。

母親の洗濯物を増やすだけ、の悪戯の数々は、ひとつの表現にひとつの
行為が対応し、行為ごとにガルガンチュワが増殖していく觀がある。章が
終わるころには、画面いっぱいに点在するワルガキ軍団が、自在に動きま
わる絵が見えてくる。同じ 16 世紀のブリューゲルの、『格言』や『子供
の遊戯』の群集にさも似たり、というのは定説になっている。画面のすべ
てが中心でもあり周縁でもあるようなブリューゲルを、テクストに置換す
ればラブレーの列挙になる。格言・慣用句を敢えて文字通りに表現するワ
ザも、ふたりに共通である。

格言は、人称のない真理が、一行に凝縮されている。王子ガルガンチュ
ワという三人称を捨てた無名の子どもが、過去・現在・未来の子どもたち
を一身に具現し、「お天道様めがけておしっこをしたり、雨を避けに水へ
潜ったり」、口唇期の肉体の、太陽もおしっこも雨も泥もうんこも一緒く
たの、内と外が入り乱れて交歓する世界が輪郭をあらわにする。

この手の格言の用法は、日本ならば、「猿も木から落ちる」を落下する
猿で、「犬も歩けば棒に当たる」を、棒に向かって突進する犬で表すよう
なものだ。むろん落下する猿の比喩は、日本語圏の外では意味不明になる。

それでも落下猿やら棒犬やらが満載のテクストや画面は、意味を超えた迫力を見るものに与えるはずである。この場合、満載というのが必要条件で、風景画の片隅で猿が一匹、ひそやかに落下していても、迫り来るものはない。要するに問題は、質より量、ということだ。

落語をネタに、省略の美德を説いておきながら、今度は質より量では矛盾している。しかし矛盾も身のうち、文学のうち。金原亭の師匠の教えをメモしたノートには、「無駄があつてはいけない。そぎ落とす。言葉を繰り返さない。繰り返すときには意図がある」と記してある。「そぎ落とす」はずの落語の、名作のひとつが『寿限無』である。じゅげむ、じゅげむ、ごこうのすりきれ……という超ビッグかつロングな名前の迫力が生きるのは、迷惑な名前をつけられてしまった「じゅげむ」君に関して、名前以外の要素が見事に「そぎ落と」されているからだ。

少年の身長、体重、顔立ち、一切が話から抜けている。「じゅげむ」君は饅頭とせんべい、どちらが好みなのか。いたずらっ子のようだが、はたして女の子にはやさしいのか。近代小説ならば、さんざんページを費やすはずの部分が、この場合は「無駄」になる。

と、ここまで書いて、あらぬことを思いついた。もしもフランス 19 世紀の文豪バルザックが江戸の生まれで、咄家になっていたら恐ろしい。彼の『寿限無』は、少年の生まれた長屋の描写から始まるはずで、路地の有様、大家の性格、近所の連中、それからやっと「じゅげむ」家に移り、おとつあんのフンドシの汚れ具合からおっかさんの行李の中身まで、40 分ほど詳説した後で、ようやく少年が誕生する。おのれ亭ばるざく先生大熱演だが、仲間の咄家は「あいつの芸は粹じやない」と眉をひそめる。お客は呆れて、ブーイングとトマトが飛んでくる。江戸時代にトマトがあつたら、の話だが。

バルザックの長い長い描写と、「じゅげむ」の長い長い名前と、どちらがホントに「無駄」なのか。答えは簡単、世間の常識からすれば、両方とも無駄に決まっている。就職活動中の学生が、自己プレゼンでバルザックや『寿限無』をやつたら、自分で自分の首をしめている。「ふざけるな」、

「そんなお遊びが実社会で通用すると思うなよ」、面接官は怒るはず。

そんなお遊びが、文学だ。バルザックと『寿限無』ではジャンルが異なり、簡潔と饒舌のツボも異なる。しかし落差からエネルギーを生む水力発電のような仕組みは、基本として共有している。

ここでラブレーに戻るとして、「じゅげむ」君もびっくりの名前の羅列をお目にかけよう。

<野菜辛之助、	穢出梨吉、
臆野病蔵、	ろくでなしきち
おくのびょうぞう	
豚肉脂焼吉、	卑怯未練介、
とんにくあぶらやききち	ひきょうみれすけ
曼陀羅華郎、	塩漬辛太郎、
まんだらげろう	しおづけからたろう
歩野疲勞助、	牛乳麵麿一、
あるくにひろうすけ	ぎゅうにゅうばんいち
葡萄鮪汁磨、	鎌川匙兵衛、
ぶどうたらじるまろ	へらかわさじべえ
	小形煎餅、>
	おがたせんべい

実際は、まだまだ先があるのだが、それこそ「そぎ落と」さねば、『藝文研究』がパンクする。一章のほとんどを占める名前の中には、「豚脂美郎」やら「醤油駄目成」やら、カロリーと塩分の高そうなものが多い。それもそのはず、全員が「勇敢な料理番たち」で、トロイの木馬ならぬ木豚に身を潜め、ワッと一斉に飛び出して、敵に襲いかかる。ちなみに敵は人間ではなくソーセージの軍団。獰猛だが刃物には弱かった。

ちなみに上の引用は『第四之書 パンタグリュエル物語』(1552年) の第40章。翻訳者の渡辺一夫は、料理番の中に「腸鍋満夫」を忍び込ませ、読者にウインクを送っている。作者と訳者が、時代と言語の相違を超えて握手をした瞬間だ。両者のダブルプレーは、言葉遊びという「ゲーム」を超えて、まさに「プレー」の精神を体現している。(英語で「遊び」は規則アリの game と、規則ナシの play に分かれることを踏まえて、仏文の私も英文にウインクを送る)。

ところで国文の落語愛好家ならば、こう思うはずだ。たしかに料理番の羅列は、全体として「じゅげむ」君の名前より量がある。しかし料理番は

総勢一五七人、いっぽう「じゅげむ」君はたったの一人ではないか。

短めの単語を束にするより、鶴の首よりも長い単語のほうが好き、といふ向きには、やはりラブレーがおススメだ。固有名詞ではないけれど、同じ『第四之書』の第 15 章に、フランス語でいちばん長い単語が存在する。

< morrambouzevezengouzequoquemorguataasacbaguevezinemaffressé >

< ぼかぼかどかどかぴちゃぴちゃめりめりごりごりごつごつ殴って >

質より量、の法則は健在で、同様の「長ふんどし語」の反復がこの章のリズムを形作っている。「しわしわがたがためりめりがくがくぼろぼろのおんぼろ」(morderegrippiotabirofreluchamburecoquelurintimpanemens) やら、「こちょこちょぼんぼんぱんぱんぐりぐりとやつつけた」(trepigne-mampenillorifrizonoufressuré) やら。アルファベットはたったの 24 個のはずが、こういう使われ方をすると、読者は目を殴られた感じになる。音読しようとしても、声を出す前に舌がこんぐらかる。書き写しながら、どこかで間違えているのではないかと不安になったが、たとえ間違えても、作者以外は、いや作者でさえも分からぬはず、と思い直した。そもそも翻訳など可能なのか、いったい「こちょこちょ」に根拠はあるのか、といえば、一応はあるのである（のである）。

「こちょこちょ……」されてしまったのは花嫁の陰部であり、原語には “trepignement”（地団太）と “penil”（恥丘）と “friser”（カールする）と “fressure”（モツ）の 4 つの単語が透けて見える。「こちょこちょ」「ぼんぼん」「ぱんぱん」「ぐりぐり」の 4 つを対応させた渡辺訳は忠実のようでもあり、半分訳者にダマされたような気もする。

半分どころか 8 割がたダマされている、と思いたくなる例が、先ほどの『ガルガンチュワ』の中にある。第 11 章で「飲んだり・食べたり・眠ったり」していたガルガンチュワ君は、第 13 章でウンコをする。飲食したら出るのは当たり前。まるごと一章をヒリ出した少年は、そのとき 5 歳になっていた。知恵者の少年は、「今までなかつたような、最も殿様ら

しい、最も素敵な、最も工合のよい、お尻の拭き方を発明」したと、父親相手に自慢する。そのためにファン闘努力して、マフラーや帽子など衣類、バラやほうれん草など植物、シーツなどインテリア関係、その他身の回りのありとあらゆるモノをトイレットペーパーがわりとし、生きた猫で拭いたらば、アソコを引っ搔かれて痛かった。

ノリノリの少年は、わが子の才能にカンドーする父に、即興の詩を詠んで聞かせる。

＜かみなどできたなきしりをふくやつは
いつもふぐりにかすのこすなり。＞

おフランスのラブレーが、ミソー文字を詠んでいたら、それこそミソもクソもいっしょになる。原文はどうなっているのか、という当然の疑問には、2005年刊行ホヤホヤの、宮下志郎氏の新訳をぶつけてみる。

＜紙などで、ぱっちいおけつをふいたとて、
いつもふぐりに、かすぞ残れり。＞

出版後すでに60年を経て、それ自体が古典と化した渡辺訳が、「ぱっちい」のひとことで、現代日本語に蘇った観がある。実はこの章を戯れに訳したがあるので、ドサクサに紛れて、拙訳もお目にかける。

＜紙で拭くのは厚顔無知さ
あとに残るよ睾丸ウンチ。＞

三者三様ばらばらで、ひとつだけ明らかなのは、原文が二行詩、ということだ。テクストでは他に二つの詩形が試みられており、中の rondeau（短い定型詩）を、渡辺一夫は訳すに事欠いて、漢詩に仕立て上げた。3人の訳の出だしを、ちょっとくら比べてみよう。

<先日脱糞痛感
未払臀部借財
同香而非同香
濛氣芬々充满>

<先日、われ脱糞しつつ
わが尻に残りし借財を感ず
その香り、わが思いしものにあらずして
われ、その臭さに擊沈さる>

<この前クソして鼻にきた
お尻の借りを返した臭い
そのクサイこと想像以上
おかげで全身ウン香漬け>

やはり漢詩は格調が高い、と中国文学にもウインクを送りつつ、思い出すのは「翻訳（traduire）とは裏切る（trahir）こと」という諺だ。極端な裏切りを許すラブレーのテクストは、懐が深い、ということだ。遊び好き、と言い換えてよい。遊び人は、自由人でもある。

言葉という意味の機械を作動させながら、意味という無粹なものを、可能な限り、ぶっ壊す。何のための力技かと問われれば、「遊びの目的は遊びそのもの」（ロジェ・カイヨワ）と答える。そういう人に私もなりたい、とうそぶいてお開きにしてもいいのだが、最後にひとつ、告白する。実はシンポジウムの席上で、『寿限無』には言及していない。宮下志郎氏の新訳も、刊行前だった。自分の発言をあらかた忘れてしまった後で原稿にまとめると、こうなる。ほんの貧の出来心、と落語なら言うところ。笑って許してくださいな。